

Contest

【過去の結果発表】

2002年オリジナル作曲コンテスト 結果発表

ズーラシアンブラス作曲コンテストの第3のカテゴリ『オリジナル作曲コンテスト』が行われ、7作品の応募があり、2つの入選作品が選ばれました。

今回はオリジナル作品の作曲で目安となる時間が5分から8分ということもあり、ハードルが高かったせいか応募数は通常の半分以下でした。しかし、応募された作品は高いハードルにチャレンジしてくださっただけのことはあり、熱のこもった作品が多く、全体のレベルは非常に高かったと思います。

応募下さった皆さん本当にありがとうございました。

そして、入選された皆さんおめでとうございます。

10月上旬をメドに ZOORASIAN BRASS Web shop にて販売を開始いたします。

残念ながら、惜しくも入選に至らなかった皆さんも、次回の『名曲アレンジコンテスト』に再度挑戦してください。

(2002/09/17)

BRAVO！ 作曲：陰下 真由子 試聴は→こちら

【コメントとプロフィール】

『BRAVO！』

金管五重奏らしい曲というよりも、吹奏楽のにおいがする曲です。ですのなるべく安定感のあるサウンドを出すために休符の少ない楽譜になってしまいました。

縦をきっちりあわせて、しっかりとしたサウンドで聴かす所が大部分を占めますが、中間部の dolce は横の流れを感じて表情豊かに演奏してください。そうすることで自然にメリハリが出ると思います。

変拍子が所々出てきますが拍子の変化を強調しつつ、あくまでも流れがとぎれないように生き生きと楽しげに演奏してください。

=====

入選について

とにかく、大好きな金管の曲が書きたかったのでこちらのコンテストの募集を見つけたときは嬉しかったです。さらに入選するなんて光栄です。

演奏する人も、聴く方々にも、金管楽器を愛する人にも、余り音楽のことが

わからない人にも、印象に残るような華のある曲を目指して作曲しました。

多くの方々に演奏していただけたらこんなにうれしいことはありません。

2002年9月 陰下 真由子

● 陰下 真由子

同志社女子大学 音楽学科 音楽学専攻卒業後、ゲームメーカーに就職しサウンドクリエイター（ゲームミュージック作曲）の職に就き、現在に至る。仕事柄シンセサイザーやパソコン上で作曲することが多く、生楽器のための曲を本格的に書きたい衝動にかられ、こちらのコンテストに応募。学生のころは吹奏楽部でトランペットを担当し、現在もアマチュア一般バンド「神戸 ウインドアンサンブル」所属。

金管五重奏のための幻想曲「仁王像Ⅱ」 作曲：熱田浩幸 試聴は→こちら

【コメントとプロフィール】

金管五重奏のための幻想曲「仁王像Ⅱ」

新聞の文化欄かなにかに仁王像の写真が載っていて、その映像からの印象や音のイメージを音にしたもので、十年くらい前に金管五重奏としてスケッチしたものを完成させました。ですから曲名を「仁王像Ⅱ」としました。Tbは音域が低いので BassTb を使用してください。

=====

入選について

今回入選したことは、大変嬉しく光栄に思います。演奏者の方々に評価していただいたことを特に嬉しく思います。

2002年9月 熱田 浩幸

● 熱田 浩幸

小学校6年の時、転校生に誘われ合奏部なる部活を初め、そこで始めて吹いたのがメロフォンでした。中学で吹奏楽部に入り TUBA を担当し以来、高校・現在に至るまで TUBA 一筋です。中学・高校と特にフィリップジョーンズブラスアンサンブルには憧れたものです。「ディスコキッド」とか「ルパン三世のテーマ」（バン、ジャンの付録）などいまも覚えています。

【審査員】

中川 幸太郎 作曲家

中川 喜弘 Trumpet 奏者・アレンジャー

大塚 子龍 ZOORASIAN BRASS 専属アレンジャー

篠原 香 Horn 奏者 ZOORASIAN BRASS OFFICIAL FRIENDS

佐藤 和彦 Tuba 奏者 ZOORASIAN BRASS OFFICIAL FRIENDS

【総評】

オリジナル曲という概念の広さを再認識した部門でした。オリジナル＝自分で作曲した曲と解釈した方も半数近くいらっしゃいました。もちろんこれもありなのですが、やはり、ここで言うオリジナルは金管五重奏（6重奏）のために書かれた作品ということになります。自分で作曲した曲はオリジナルといわなくとも【作曲】で良いのですから。

今回の部門は曲の演奏時間が長いために応募作品は少なかったのですが、その分力作が揃っていました。入選の分け目は、1) オリジナリティがあるか 2) 金管アンサンブルの魅力を引き出しているか 3) 長い演奏時間をきちんと構成できているか になりました。

惜しくも選外になった作品の中には音楽的に非常にまとまった秀作もありましたが、そうした作品は金管アンサンブルとして現実的でないものが多かったように思います。音楽は人が演奏してナンボですから、そうした方々は、作者のこだわりを演奏者に押しつけるのではなく、効果的によい演奏が引き出せるような工夫を施して欲しいと思います。音楽的に重要なこだわりは、作曲ですからもちろん必要ですが、演奏を大変に困難にしてまで貫く必然性のない、作曲家の自己満足的なこだわりは、プレーヤーに負担をかけるばかりでなく、とどのつまり誰も演奏しない曲になってしまいます。これを嫌って、規定にも【無駄に難しい】を避けるように書いてあるのです。最も、それを作曲した人が世界に名をとどろかせる大作曲家なら話は別ですし、【無駄に難しい】の判断も人によって違うので曖昧ですが。

数人ではありましたが、作品のほとんどをダイアトニックコード主体で作曲されている方がいました。時間が約5分と長いので、ダイアトニックコードだけでは厳しいですね。作曲や編曲の入り口としてはダイアトニックコードは大変重要ですが、コンテストで入選するためにはそこから1歩も2歩も抜け出さないと欲しいと思います。ただし、前回のコンテストにありましたが、でたらめな和音進行とは異なりますので気をつけてください。凄まじい現代曲は別かもしれませんが、ダイアトニックを外れても和音の機能は無視できないと思います。

応募数が少なかった割に素晴らしい2作品が選ばれました。ただ、ZOORASIAN BRASS が子ども達の前で演奏するには厳しいので、オリジナル作品の ZOORASIAN BRASS による初演は、次回春先に開催予定のオリジナル作曲コンクールと合わせて、CD化するとき（できればの話ですが）にしたいと考えています。